

## 教育領域 (図画工作・美術・工芸) における美術事象の現実性に関する検討

石井 壽郎\*

美術分野

(2017年6月21日受理)

ISHII, T.: An Examination of Reality in Art Case (Art and Handicraft · Art and Design · Crafts) in the Field of Education. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 69: 121-129. (2017) ISSN 1880-4349

### Abstract

It is best when educational content holds real-world applicability for students. If we consider education to be a form of communication, treating education as a phenomenon that vividly occurs within students receiving that education may serve to deepen that communication. Far too often, students find it difficult to see the real-world applicability of art case that are introduced as part of their education.

In this study, we explore ways to further deepen the communication that occurs during education about art case by examining the real-world applicability of the educational content from the recipients' point of view. In addition, we investigated instances of art in recipients' everyday environments and conducted a case study comparison of these instances. We speculate that instances of art within education that hold real-world applicability to recipients have the potential to deepen communication.

**Keywords:** communication, activity, ordinariness, reality

*Department of Art, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 教育の場で教育内容として扱われる事象が、教育対象者にとって現実性 (reality) があることに越したことはない。教育をコミュニケーションと捉えれば、受ける側の中に生き生きと存在している事象を扱うことで、そのコミュニケーションがより深くなることが考えられる。しかし、教育教科の中で、美術・図画工作は現実性を感じられる事象として受け入れられづらい場合が顕著にある。本論では教育を受ける側に立って、やりとりする内容の現実性を考察・検討する事で、美術・図画工作という内容をもとに、教育というコミュニケーションをより深める手立てを検討していきたい。

本論では、受容者が日常を過ごしている環境に在る美術事象をとりあげ、その事例対比をもとに検討を進めた。そこからコミュニケーションを深めるための内容としての美術事象とするには、受容者側の現実性に関わる方策に可能性あることが挙げられた。

---

\* 東京学芸大学 美術・書道講座 美術分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

## 1. はじめに

教育をコミュニケーションという側面から考えると、コミュニケーションでやり取りされる内容が、コミュニケーションをする双方にとって現実性 (reality) がある事象を用いることで、そのコミュニケーションの深度が深くなることを見込める。教育領域にて内容となる図画工作・美術では、美術域に在る側と市井の人々 (一般人) が教育というコミュニケーションをする場合に、用いられる美術に関する事象に現実性が伴い、深いコミュニケーションになることによって、人々が普遍的に活用することができようだろう。

現在、受容する側にある人々、特に若年層を中心により一層デジタルカルチャーが拡がり、すぐ横にある現実であっても現実性を覚え、一見実体感がともなわないデジタル世界に勤しむ事が当たり前な状況が拡がってきている。このような現状の最中で学校教育ではアクティブラーニングを推奨し、主体的学び、対話的で深い学びが求められている<sup>1)</sup>。人と人が対峙し深め合うための時と場を設け、より良い今後を期待してのことだろう。ここから考えてもコミュニケーションするとき現実性が及ぼす影響を考え、検討していくことに重要な可能性があるように思える。人々にとって現実性がいかに影響するのか、また、その現実性は様々な事象の何処に呼応するのかを検討することが必要なのではないだろうか。

一般人がどのような事象に現実性を覚え、どのようにその現実性を頼りに反応するのかを踏まえた上で美術事象を再構築し、一般化することで普遍的に美術要素が社会に存在することを知らせ、それぞれの人々が活かせる方策を練っていききたい。

## 2. 前提

一般人が美術に現実性を見出せないとは如何なることだろうか。人々にとってこれまでの経験上で影響が少なかったなど様々な理由が考えられるが、何れであっても自分に関係が少なく、それ故自分と重ね合わすほどの感覚がわからないということだろう。美術領域で行われてきた事象も、長らく日常を改革するための方策として非日常を謳ってきた経緯はあるが、あまりにも一般人の日常から乖離してしまったのかもしれない。そのような関係性で美術領域と距離がある人々も日常の中で学校教育を経ている。その教育の教科である美術・図画工作に関係のある事象も、特別な存在として認識されることが日常的であるように見え

る。一般生活に近い事象といえるデザイン領域のモノやコトであっても、モノやコトで溢れる日本において接点は頻繁にあるように思えるが、商品や催しなどの計画された事象は特定の事業主がいて、それを制作する特殊な制作主の計画のうへ、業者が販売や催しを行っていることである。多くの一般人の人々は与えられる側の消費者の立場で接することが常であり、その傾向は近年益々増してきている。それ以外の美術の専門領域が展開していることは、さらに特殊な過程を経て成り立っていて、その先で美術館をはじめとする発表の場などの公開・体験する特別な場で触れることが主である。さらに、ある種その場自体で特別性を帯びてしまう教育の中で享受するとき、どのくらい現実性を感じる事が出来るだろうか。その特殊性により一般人の人々自身の現実性はさておき、特別なこととして取り扱われることがますます多いのではないだろうか。このような特殊な領域として認識されうる事象に対し、一般人の人々はどのような現実性を感じているのだろうか。あくまでも受ける側として振舞うことが当たり前な溝が拡大しているのではないだろうか。

これまで美術領域にある人々はこの領域を活かすべく形態を様々に解体して一般社会に進出し、そして、より一層その距離を縮めるべく努めてきた。教育域では興味・関心を煽るべく尚更に寄り添い尽力してきたはずだが、未だとどかず充分とは言えないのではないだろうか。「生活の中で児童が身近に感じられるもの<sup>2)</sup>」と示され、教科としてより受容者の現実性を大事にする図画工作領域に於いても造形遊びをはじめとするその内容は、その場限りの特別性に満ち、特殊な時間と受け取られているように思える。なにがことさらこの領域を特殊・特別にさせているのだろうか。

一般社会に在る美術事象があまりにも人々の現実の連なりとしての日常から離れてしまい、関係性が希薄になり、他人事として捉えられていることが特別・特殊に感じさせているのではないだろうか。人々に特別・特殊と受け取られているのなら、そこに人々の日常性が帯びることもなく、人々が現実性をもって関わることも希少になる。現実性とは人々のそれぞれの日常から作り出され強められるのではないだろうか。少しでも人々との距離を縮めるためには日常性に注視しながら、人々自身に関係のあると感じられる現実性を、美術の事象に位置付けることが必要になってくる。本論では受容者の日常性から得られる実感を現実性として論考に使用していく。

### 3. 目的

本論において、この領域が特別・特殊性によって人々に隔たりを感じさせてしまう原因の大きな要因の一つとしてあげるのは、人々にとっての日常的な現実性が未だ希薄であることにありと考える。この現実性を受容する側の目線で考察し、受容者の現実性を検討することで、改めてコミュニケーションを深くしていくための美術事象の現実性を再認識していくことを目的とする。

### 4. 検討の方法

一般社会における美術に関する事象といっても広く様々ある。本論では日常的な現実性を考察・検討を進めるため、受容側の目線にたち受容側の日常的な環境に存在する美術事象を事例として取り上げる。本論では、その中でも一般の都市空間に存在するパブリックアートの事例をもとに考察・検討していくこととする。

本論においてパブリックアートと指し示すものは、美術専門領域でいわれる1930年代スウェーデン・アメリカ、1960年代日本において認知されはじめた美術の形式呼称としてのパブリックアートのみならず、不特定多数の市井の人々が日常の中で出会う美術事象をパブリックアートとして扱う。

まず、受容者との関係性をもとに日本のパブリックアートのこれまでの経緯を概観し、抽出した観点としての他国の事例、対比としての日本における事例、そして、双方を比較検討して論考を進め、本論においての検討を進める。

### 5. 経緯概観

事例検討に入る前に、日本におけるパブリックアートの歩みを発信側と受容側の関係性を中心に概観し整理しておく。年代ごとに様相をまとめ、( )の中にはその年代の目立った美術事象や社会の動向などを挙げておく。

～1940年代

パブリックアートは我が国創世記よりの聖地の事象・道祖神から始まり記紀神話、宗教関連、地域などの偉人の銅像などが出現し、戦前・戦後はイデオロギー扇動のための彫刻の設置を行ってきた。(御神体)

・神仏の象徴として御神体そのものや、偶像を用意す

ることで信仰の対象として受容者に受け入れられていた。その流れのまま国や地域にとって象徴に値する事象を用意し、受容者の啓蒙に役立てていた。メディアとしての役割もあり、良い意味でも悪い意味でも受容者は能動的に反応していたといえる。

1950年代

野外彫刻展の出現により製作側の趣向を反映する形式で、自由や平和といったテーマの母子や裸婦といった創作作品が、一般の街角に設置されていった。また、実験芸術などが街中に出没し始める。(野外創作彫刻展)(デモクラート)(具体美術協会)

・この頃より制作者の趣向が強く反映するようになり、受容者からはいわゆる芸術作品の鑑賞としての対象として受け取られ始めた。

1960年代

都市環境の改善から地域の文化振興や個性化を狙った作品設置が始まり、この頃より更に作者の個人的表現を用いて作品も前衛化し、一見不理解のものが多出し始める。この年代に日本で本来のパブリックアートの呼称が認知され始める。日本の宇部市・神戸市にての野外彫刻展から呼称されるようになり、その以前は野外彫刻/環境美術などと呼ばれていた。(反芸術)(位相-大地)(ランド・アート)

・更に美術領域の特に西洋の流れを反映した美術事象が表れ美術の非日常性が強まる。これにより受容者には容易に理解が及ばない領域として認知されていく。

1970年代

ほぼ万博を契機にサイト・スペシフィックに地域に関わりを持つ作品形態が進出しはじめた。(もの派)(八王子彫刻シンポジウム)

・その場に固有の要素を反映するサイト・スペシフィックという概念が進出してきたとはいえ、このことさえも美術側の流れであって、もの派のような日本固有の解釈をもってしても受容者と距離はおおきくなるばかりであった。

1980年代

野外芸術展などでサイト・スペシフィック要素の強い展示がふえたものの、事業化著しく行政主導のもとオーダメード式の設置構法で形骸化され始めた。後に地域住民不在の彫刻公害などと問題視される。野外展形式が行政から民間に移り郊外に広がり始める。(文化行政)(町おこし・村おこし)(ふるさと創生基金)(白州夏フェスティバル)

・もはや受容者の許容範囲をこえ、著しく拒否さえされる傾向が進む。ただし、美術の有り様に対する不理解が直接の原因というより公共構造による経済問題へ

の拒絶が強い。

#### 1990年代

この年代前後にはレジデンスなどの形式が進出し、実際の地域に制作者側が入り始めた。地域環境の再生を目的とする芸術振興のための野外彫刻展や芸術祭が始まった。(ベネッセアートサイト直島)(ファール立川)(注文の多い楽農店)

・これまでの経緯を省みる向きもあり、美術事象単体を設置するだけではなく、美術事象が生成する周辺環境自体を地域に導入することで、美術自体の効力をいかそうと働きかける動向をしめす。受容者との関係性を出会いから構築し始める。

#### 2000年代

この年代以前からある芸術振興のためのプロジェクトも依然あるものの、地域再生プロジェクトの形式化が進み、地方にて大型の芸術祭などが地域振興のプロジェクトとして定着していった。(21世紀型都市再生プロジェクト)(都市再生特別設置法)(大地の芸術祭)

・現在、より一層地域との関わり合いを重視した制作を行うが故に、現地の人々とのコミュニケーションを起点とする制作が定着し、その作例は多様に解体されていることがめだってきている。制作者が物理的に近づいたことにより、受容者側にも親しみは増してはきているようだ。

### 5. 1 概観整理

現在、この領域はアート・プロジェクトとして地域に進出し寄り添うように受容者側に近づいて物理的距離の短縮し、直接受容者と対峙しながら理解を深めつつ表現することにより、美術に親しみを抱く傾向が徐々にではあるが広がっているといえる。橋本氏が「アート・プロジェクトが、人と人・人と都市を結ぶインターフェイスの役割を現代美術が果たしている」と述べているように<sup>2,5</sup>、発信側と受容側の距離は近くはなったと言えるが、果たして、その接点を越えて受容者が自身で暮らしに活かせるほど美術を認識したとは言いきれないのではないだろうか。近代以前は受容者の生活に溶け込みパブリックアートは存在していた。近代化以降、国の政策により紆余曲折し、近年は資本主義経済の理論に則りながらも、出来てしまった距離を埋めるべく受容者に向かい働きかけている。しかし、発信者側との出来てしまった距離により真实性が損なわれたまま、依然その日常的距離は埋まっていけないようだ。非日常を謳い離れ、省みて近づいたが未だ自分のこととして捉えられぬ非日常的な異質感は拭えない。相変らぬ特別・特殊性であっての距離を感

じずにはいられない。近代以前は受容者の生活とともに美術があったのならば、受容者は美術事象に現実性を持っていたのだろうか。ここで、とって返して近代以前に立ち返り考えてみたい。

以下、検討事案を明確にする視点を、日本の近代以前の受容者との関係性を保持する国の事例に求め検討をすすめる。

## 6. 事例 1

### 6. 1 報告

以下、受容者との関係性が素朴に密接であったと考えられる事例としてブータン王国における事例を通し検討を進める。

2013年3月4-6日の期間でブータン王国の玄関口パロと首都ティンブーを訪問。(写真1)実際にブータンを訪れてみたことで生活と信仰の結び付きの強さを目の当たりにした。主要街道沿いや重要な分岐には仏塔の主要三形式のいずれか(チベット式仏塔, ネパール式仏塔, ブータン式仏塔)が設置され、最重要の分岐路には仏塔三種ともに建立されていた。(写真2)道筋には経を唱える代わりに回すマニ車<sup>★1</sup>が特大のものから小型のものまで用意され道祖神ともども設置されている。(写真3)(写真4)人々は最低でも朝晩の礼拝は欠かさず、その回数は個人により増していく。信仰と生活が一体化していると生活自体が信仰であり信仰することが生活になるといっても過言ではない様相が広がっていた。(写真5)いずれにしろ、信仰と人々の物理的・心的距離が近く、人々にとって寺社仏事が身近な存在であり人々の日常と交じり合っていた。これが美術事象との関係性において顕著にわかる例示として以下の件を挙げる。

このような環境にあるブータンにも芸術に関する大



写真1 首都ティンブー



写真2 三種の仏塔



写真3 マニ車



写真4 道端の仏塔



写真5 寺院中心部



写真6 伝統技芸院, 彫刻の授業風景

学は存在する。伝統技芸院(Zorig Chusum)は、ほぼ全科をあげ仏教美術の為の修練を行っていた。NGOとして欧米をはじめとする芸術概念、とくに個人の表現を核に据え広げていく芸術を指向する芸術組織バスト・ブータン(VAST Bhutan)という団体が進出しているのだが、前者の伝統技芸院は毅然と仏教美術に勤しんでいる。(写真6)

美術概念の対比として特筆すべきは、日本でも寺社に纏わる美術を扱う領域・組織は存在し、その対象に対し『保存・修復』という概念であたっている。しかしブータンのそれは『保存・修復』ではなく、むしろ『維持・修理』と表したほうがふさわしい。伝統技芸院にて取材をしている時も、代表者と現場の方からの言葉の中に「保存」という言葉は出てこなかった。まさに仏教を「使用」していて、そのための道具としての寺社や仏具であるので、現在の日本で表せば車や携帯電話のような実質的な道具と表したほうが相応しい。こう考えると伝統技芸院で育成される人材は修理工の趣がつよい。社会的に下位とみるわけではなく、実質的に稼働している実業という意味である。卒業後、

この環境にあれば当然のように寺院やそれに準じる職業や稼業に恵まれている。この構図が日本との対比を浮き立たせ、信仰が日常に溶け込み人々との距離の近さを尚更うかがわせた。

## 6. 2 事例1の考察

2014年よりブータン王国において「arts」という教科を学校教育で施行する計画があり、現在(2013年3月時点)教科を立ち上げる準備のため、日本の海外協力隊が協力者として派遣されている情報を得た。これを受け、近代化以前の「美術」の有り様をうかがい知れると考えた事が訪問理由であった。

結果的にこの国は信仰とともに人々の生活があり、その信仰に美術領域が深く根ざしていたといえる。必然的に人々は美術事象に対し現実性をもとに自ら関わっている。日本の状況と対比してみると美術事象と受容者の距離はなく、おおきく重なっているのではないだろうか。近代化以降おおきく変容した日本においても、この時点では同様な関係性であったと十分に想定できた。一概に巻き戻すこともできない

が、現在の日本にも宗教事象は存在する。この事実を支点にブータン王国の事例を踏まえて検討を続ける。

## 7. 事例2

### 7. 1 報告

以下、日本の宗教実際にまつわる美術事象の事例として筆者が関わった制作事例を通し検討を進める。

東京都某神社より、創建記念事業によるモニュメント制作の依頼要請を受ける。創建にまつわる逸話に即した遺物にあたる依代が存在しないことにより、創建記念のモニュメントを作成し、依代とする計画において制作を求める依頼であった。『天智天皇四年、藤原鎌足公が東国下向の際、島に船を寄せられ、本社を歓請し太刀一振りを入れて旅の安泰と御神徳を仰ぎ奉りましたのが起りであります』という逸話が要請下の神社創建の由来である。この現況の信仰に則した遺物を制作するという要請に対し、屋外に設置するという条件が付与されている事もあり、石材によるモニュメントを制作する計画を立てた。(写真7)

ブータン王国の事例をうけ対比事例とするため、計画立案の過程から氏子総代会・主要氏子代表・氏子との意見交換を十分にしながら進めていった。氏子の方々と綿密に話し合う必要性は、主施主は神社に寄進する氏子の方々であるとともに、このモニュメントの第一の受容者であるためである。実際の施工にあたる施工業者も氏子側から選出し、地域の興行としても成り立たせるべく注意した。

#### (1) 計画概要

建立計画を進めるにあたって、西暦600年代に使用され神に奉納するに値する太刀は、隣国中国(唐)より百済経由で伝来した直刀と想定し主象徴とした。基本形状で具体的に直刀そのままの形を用いる。当初、



写真7 計画図

主に氏子総代会との面談にて、一般方々からすると刀そのままの形を用いなければ、由来とのつながりを理解することが困難であることが想定される為、直刀をそのまま模した造形をレリーフ状にあしらい周囲2m、高さ1.2mの自然石状と計画する。境内の玉砂利の中から白色の砂利を拾うことにより、白星を拾うことになぞって祈願成就の習わしとして神社が推奨している為、材料となる石材は白色にする必要があったが、全体に使用すると予算に見合わず変更を余儀なくされた。そして、刀のレリーフ付近だけ白色の石材を使用することになる。これを受け、モニュメントの母体を使用する石材に氏子の方が代々所有し、現在は区画整理のために路上史跡になっていた4.5tの庭石を採用することになる。結果的に由来にまつわる島の見立てとしても、元々この地域にあった石材は適材であった。

#### (2) 制作工程

実際の施工状況を順序に沿って列挙する。

- ・ 景観を含めた図案を作成
- ・ これを用いて意見交換を重ねその度に図案を改変しながら合意をとり、おおよその全体図案を決定する。
- ・ 見積もりをあげ氏子総代会から承認を得る。
- ・ 実際の施工業者を選出、全体図を元に進行の計画を立てる。
- ・ 計画過程で予算上の問題でモニュメント本体は中国の業者に依頼することとなる。
- ・ 本体のみの図案をおこし、中国・廈門の専門業者と関係のある日本の専門業者を打ち合わせる。
- ・ 予算上の都合でモニュメント主要部だけ作成依頼することに変更。
- ・ その旨を総代会にて審議打ち合わせのち、一氏子から本体の石材を寄進していただくことに決定。
- ・ 中国・廈門にモニュメント主要部依頼
- ・ モニュメント母体となる石材の移動。
- ・ モニュメント母体を元に石材業者と制作過程打ち合わせ
- ・ モニュメント主要部完成、運搬輸入、受け取り
- ・ 現場整地
- ・ 土台作成
- ・ 現地にて組み上げ
- ・ 除幕式(2016年7月24日)(写真8)

### 7. 2 事例1の考察

ブータン訪問時にこの要請を受ける。承諾するにあたり、ブータン王国にて得た知見を反映させ制作にあたることにする。制作を終えて、要請から完了までの期間に約3年を要した。ただ時間を消費した訳ではな



写真8 設置完成

く、制作過程で要請側との対話を重視した結果のことである。

パブリックアートは常に環境としての人々の関係性という社会の変容にとともにある。当然寺社にある依代作成の過程にも、地域プロジェクトで大事にされる地域側との対話は存在し、可能であった。しかし、現代社会の仕事として考えると、この時間感覚では成り立たない。同様に、地域興行の旨で地元施工業者に協力依頼するために業者選定したおり、地域に関わりのある5業者中、実際に石材加工を行う業者は2業者に過ぎず、他は墓石清掃が主な業務であり、実際に委ねた1業者であっても予算構成の問題で余る場合は、中国に発注する顛末であった。現代の経済社会に則れば当然の構図である。さらに、受容者側でもある要請側の氏子総代の方々は神社振興のためこの件を想起されている。東京に位置するこの神社が置かれた地域では、次世代はほぼ他地域に移動してしまう。かわりに東京以外の地域から盛んに流入するが、馴染まない氏神においそれと信仰はしない。信仰の対象としての神社経営はやはり資本主義経済の恩得が仇となり、都市化とともに分裂した地域において成り立たっていなかった。そもそも明治初期の国の政策の廃仏毀釈<sup>★2</sup>からはじまり、現代形式の経済が先導する社会構造の中で信仰においても関係性は分断せざるをえないといえる。

## 8. 比較検討

ここまで現在の日本におけるパブリックアートの事例概観、他国の事例、筆者の制作事例について報告してきた。これより双方を比較しながら受容側の真实性をキーワードに据え検討していきたい。

ブータン王国の事例を整理すると、信仰に即して寺

社諸々は人々の日常に溶け込み、必然的にその寺社に纏わる美術に現実性をあたえ人々に近い距離にあるといえる。かたや、現状の日本の事例では、現代社会の特に近代化により信仰としての寺社の社会的位置は解体され、近現代資本主義経済の理論で維持されているが、一寺社の振興事業として制作が行われることにより人々の日常から距離が出来ていた。国の社会構造の比較としては、双方のこれまでの歩みの違いがあり一概に判断できないが、その世界の構成員である市井の人々の対比からみていくと「信仰」という事象が浮き上がってくる。双方、宗教関連の事例であるため「信仰」という言葉が出てくるのは当たり前に見えるが、信仰に即したかたちで美術事象との距離関係が見えて来る。本論の検討を明確にするため「信仰」＝「無償の行為」(無償＝資本主義経済価値の有無の無)としたい。この無償の行為を行わせている鍵が人々の「現実性」にあるのではないだろうか。そして、その「現実性」にはその人自身の日常が深く関係付いている。ブータンの事例から見て取れるが、日常という生活に宗教が溶け込んでいた。その環境があれば個人の現実の連なり(蓄積・積層)が日常であるがため、日常に溶け込んでいる宗教という逸話に、自身を重ねて生活を送っているともいえる。その自身を重ねようとする発端に現実性が関わっているのではないだろうか。しかし、日常に溶け込んでいるが故にその機会も多いのだが、ブータン王国の人々には他の選択肢がないことで逸話を選択することはできていない。

日本において、宗教という逸話が身近でなくなり生活と距離が出来てしまった人々の「無償の行為」にあたる事柄についていかなることが考えられるのか。もともと「創唱宗教」(特定の教祖がいて明確な教義有)日本人には馴染まない<sup>4</sup>と指摘もあるが、日本においては近代化以降に都市化から由来して、集団から個人に向かう方向性で変容し、個人はよりそれぞれに無償の行為を行っていると言える。より個人的に選出した逸話を対象にしているだけで、ブータンの人々と変わらない無償の行為をしていると考えられる。双方、個人的逸話に無償の行為を自主的に行っているのだ。この自主性が信仰にとっては重要な条件になる。自ら選び自ら無償で行う能動的な行為であるからこそ信仰になるのではないだろうか。美術事象がこの自主的行為に向かわせる現実性を帯びれば美術事象が特殊・特別という枠を超える可能性となるだろう。この可能性を裏づける人々が無償の行いとして自ら働きかける事例は、現在の日本の美術事象にも存在する。本論5において報告した、日本のパブリックアートの経緯概観に

ある1980年代より出現し始めた行政・企業先導型の事例である。特に2000年以降の企業先導型のパブリックアートの事例が象徴的であった。

2009年7月18日-8月31日の期間、東京都台場に位置する潮風公園に、TVアニメーションに登場するロボット立像が実物大の18メートルで建造された。(52日間で415万人を動員した)<sup>5</sup>連日、市井の人々が大学見学を訪れたことにより、2010年3月会期延長の末、静岡市葵区に移設され約8ヶ月設置の後、翌年4月に先導企業が台場に施設を建造し敷地内に再び設置された<sup>6</sup>。筆者も深夜に見学を訪れたが、付近は多数の他府県のナンバーの車で渋滞し、これを越え設置場所に到着すると照明もない中で黒山の人ばかりになっており、その人々が携帯電話で撮影するフラッシュで巨大な立像が瞬きながら浮かび上がっていた。この事例に準ずる事例は2000年代前後に増え、1993年島根県港市の水木しげるロードの立像、1996年宮城県石巻市の石ノ森章太郎記念館マンガロードの立像、2009年兵庫県神戸市の実物大鉄人像などが挙げられ、いずれも動員数は圧倒的に多く、概観で示した他のパブリックアートの動員数を大きく上回っている。

この一連の事象は人々にとって日常に存在し身近な逸話であり、自身を重ねることを能動的にさせる現実性を保持した事例といえないか。この事例において気を付けておきたいのは、漫画・アニメというコンテンツ自体がそうさせたのではなく、そのコンテンツがこの日本の日常に逸話として存在していて、人々はその日常の中で暮らしを営んでいるという事に着目したい。日常の中に存在する逸話の中から自身の現実性をもとに自ら選択し、自ら無償の行為、この場合自ら赴いて愛でる、という現象が起きたということではないだろうか。さらに、日本ではブータン王国に比べ逸話の選択肢が多い故に、選定するときにおいても現実性のもとになり自ら選定したといえる。その選定させた現実性を持ちあわせていた個人が膨大な数で存在したのだ。本論の論旨で動員数をもちいた検証は重要とは思えないが、日常に存在するからこそ膨大な数になっていると考えると重要な要因ではある。「自ら」ということはこの教育領域にとっても重要な要素であり、それは自ら表現するだけではなく、自ら鑑賞する、自ら選んで見に赴いたということは見逃せない現象なのではないだろうか。何れにしろ、日本においても、人々は現実にはない逸話に対し、より私的な現実性をいだいて自ら無償の行為を行っていたといえる。

自ら行うことを促す現実性とは如何なることであろうか。重要な要素である日常とは、その人自身の日々

の現実の連なりであり、現実性とはその日常から生み出される関係性といえないだろうか。そうであるならば日常が変わることで、その現実性にも影響があり無償の行為を行う方向も変わるのではないだろうか。これを裏付ける、現実性に日常が大きく関わっていることがみえる事例もある。

宮城県仙台市にて毎年8月6日-8日で行われる七夕まつりの事である。五穀豊穡を願う信仰であるが、やはり時代の流れにより地域振興への変容は免れず、主要商店街の振興プロジェクトとして行われている。その中で商店街側が用意する巨大な吹き流しで有名だが、2010年時点でこの吹き流しの製作は、ほぼ8割が造形業者に発注している状況であった<sup>7</sup>。しかし、2011年3月11日東日本震災を経験後、業者発注は2割に減り、復興願う地域住民と市井の人々が制作側へと変容した。

この事例は日常が変容すると現実性も変容し、人々自ら創造行為に関わったといえないだろうか。この場合も、無償の行いの方向は変わったが、変わらず人々は行動根拠となる自身の日常からうまれた現実性で能動的な行為を行ったといえる。この事例は美術事象と受容者側の関係で考えれば望ましい状況にあると言えるが、劇的に日常が転換しない限り望めない。しかし、人々の日常から解体し、そこから美術事象の現実性を考えれば十分に人々との関係を深くできる可能性は見出せる。

## 9. まとめと今後に向けて

日本において街中に在る美術事象は、振り返れば1990年代以降はより社会構造の変化にも影響されながら、受容者側に寄り添うべく距離を縮めてきた。一方、人々はそれぞれの日常性(現実の連なり)を基準した現実性を保って自身を重ね合わせられる逸話(事象)を自ら選び、自ら無償(資本主義経済的ではない)の行いを対象に向かって働きかけていた。これが本論の検討で整理し抽出できた、現段階でのコミュニケーションを深めるための現実性の資質である。真実性とは、その人の日常という現実の連なりから培われる価値観ともいえ、これにより自身のこととして感じるからこそ、自らの能動性に則り対象にむかい働きかけるのではないだろうか。人々の日常から歩み寄ることをしなければ、現実性は得にくく、深いコミュニケーションへつながる期待は少ない。特に市井の人々が対象である教育域で活かす場合には、より一層慎重に扱わなければならないのではないだろうか。



日本における美術と人々の関係は、そのベースとなる社会と同様に地域が解体され都市化が進み核家族化がすすむことにより、より個人的な感覚のうえで成せることとも思える。むしろ、美術と人々の距離関係が遠くなるより社会の変容による距離関係の方が遥かに広がっているのかもしれない。しかし、個人の日常性という本能にも似た性質がある限り、人々はそれぞれの現実性を生み続けるだろう。その意味の現実性を帯びた美術事象を教育領域で用いれば、より一層に教育受容者の深い学びにつながるだろう。

本論では筆者自身の事例を中心に論考を進めたが、あくまできっかけにとどり着いたにすぎず充分とはいえない。今後さらに本論を深めて一般化することで、個人が自身で他者とのより良い関係を結ぶ手立てとして資せるように努めていきたい。

### 謝辞

本研究に際しご協力くださった、ブータン王国の方々、神社関係の方々に深く感謝いたします。

### 註

- ★1 マニ車とは、円筒形の回転構造で、一回転させると念仏を一回唱えたことになる器具、巨大なものから手持ちのものがある。
- ★2 廃仏毀釈(棄釈)とは、明治維新政府の神道国教化政策にともなっておきた仏教の抑圧・排斥

### 文献

- 1 中央教育審議会中央審議会 教育課程企画特別部会 資料1
- 2 文部科学省, 学習指導要領解説, 図画工作編, p40
- 3 橋本敏子, 1997, 「地域の力とアートエネルギー」, 学陽書房, p165
- 4 阿部利満, 1996, 「日本人はなぜ無宗教なのか」, 筑摩書房
- 5 松井広志, 2012, 「物語・記憶・擬似アウラ: 実物大ガンダムの<魅力>と物質性をめぐる考察」, KG社会学批評創刊号, p110
- 6 GUNDAMU FRONT TOKYO <http://gundamfront-tokyo.com/jp/floorguide/gundam.php>
- 7 高橋綾子, 初沢敏生, 2003, 「仙台七夕まつりの変容に関する一考察」, 福島大学地域創造 第15号, p4~5